

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 世界の言語研究所（7） トルコ言語協会（TDK）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://repository.ninjal.ac.jp/records/2051">https://repository.ninjal.ac.jp/records/2051</a>

## トルコ言語協会 (TDK)

林 徹（東京大学）

### 1. はじめに

トルコ言語協会（Türk Dil Kurumu, TDK）はトルコ共和国の首都アンカラにある。これまでトルコ国内の研究者を組織して研究プロジェクトを実施するとともに、トルコ語に関する現実的な政策とも関わってきた。従って、研究所と呼ぶのは必ずしも適当ではないかもしれない。しかし、トルコには他に取り上げるべき言語研究所がないこと、さらに、トルコ共和国成立以降、言語の問題は常に政治的・社会的問題を反映し、現実的な問題と関わらないトルコ語の研究がそもそも存在しえなかったことを考慮し、本連載の対象としては異例ではあろうが、研究以外の事柄も視野に入れつつ、その設立から現在に至るまでの活動を簡単に紹介することにする。

### 2. トルコ言語協会の設立

20世紀初頭までトルコ語はアラビア文字を用いて表記されていた。しかし、前後の文字との結びつきによって字体が変化する点、同じ文字がいくつかの異なる音を表す点、母音が表記されないことがある点、アラビア語やペルシア語からの外来語は原則としてそれらの言語での表記のままである点、などが、社会の近代化が進むとともに問題にされるようになった。そこで、トルコ語の音と一対一に対応しかつ字体が変化しない、改良されたアラビア文字の導入や、ラテン文字による表記などが提案されたが、採用にまで至ることはなかった。しかし、1923年にトルコ共和国が成立するとすぐに、初代大統領ケマル・アタチュルクの指示により、ラテン文字導入を検討するため政府に「言語委員会」が設置される。そして1928年、法律により、この「言語委員会」が用意した、ラテン文字アルファベットからなる新しいトルコ語アルファベットが制定された。いわゆる「言語改革」の始まりである。

「言語委員会」が一応の任務を終えて1931年に廃止された翌年の1932年7月12日、アタチュルクは言語改革をさらに押し進めるために「トルコ言語協会」の設立を指示する。当時の名称は、「トルコ言語研究協会」（Türk Dili Tetkik Cemiyeti）であった。「トルコ語本来の美しさと豊かさを明らかにし、トルコ語を世界の諸言語の中でそれにふさわしい地位に高めること」という設立目的からは、国民国家としてのトルコ共和国を支える新たなアイデンティティの模索が感じられる。その後、協会の名称は1934年に「トルコ言語研究協会」（Türk Dili Araştırma Kurumu）に変えられ、さらに1936年に現在の名称となった。

### 3. 初期の活動

トルコ言語協会が設立された2ヶ月後の1932年9月26日、第1回トルコ言語会議が開催され、言語改革の目標として、当時のトルコ語で多く用いられていたアラビア語やペルシア語からの外来語彙をトルコ語固有の語彙と置き換え、これらの普及に努めることが決定された。「トルコ語純化運動」(Özleştirme)である。トルコ言語協会はまさにその活動の中心となった。

初期のトルコ言語協会の事業は、すべて何らかの意味で「トルコ語純化運動」に関係していた。その中でおそらく最も重要なものは、外来語を置き換える候補となる固有語を探すことを目的とした、方言語彙の収集(トルコ語で derleme という)であろう。法令によりトルコ全土のすべての学校が語彙収集作業のセンターに指定された。それらを、各郡に設置された「語彙収集委員会」(郡長が委員長をつとめ、町村長、教育長、保健所長、学校長、駐屯部隊の司令官から成る)が監督し、それをさらに県知事が委員長をつとめる各県の「語彙収集委員会」が監督するという体制が整えられ、トルコ言語協会は、全体の作業の実施本部となった。調査の担当者には、あらかじめ語彙収集作業の手引きが配布され、その方法に従い、共通語にない方言語彙を、調査地点や話し手などの情報とともに、ひとつずつカードに記入し、語彙収集センターに提出することが求められた。4, 5千人が参加し、1933年9月までに1万3千語以上が集まった。これらは編纂され、『トルコ方言語彙集』として1939年から1951年にかけて出版されることになるが、それ以前に、外来語と置き換えられるべき語彙リストを準備する際にも利用された。

方言語彙の収集とともに、文献からの語彙収集もトルコ言語協会のもとで行われた。約150点のトルコ語の代表的な歴史的文献が選定され、研究者たちを動員して用例付きの語彙カードが作成された。成果は1934年から出版され、これも新しいトルコ語標準語語彙選定に利用された。

こうして産み出された新たな標準トルコ語(「固有トルコ語」öz Türkçe)は徐々に普及していったが、1936年の第3回トルコ言語会議にオーストリアから参加した H. F. Kvergic により「太陽・言語学説」が発表され、アタチュルクがこれに支持を表明すると、それまで急速に進められてきた言語純化運動は、停滞を余儀なくされる。この説自体は、「人類が最初に対象として認識したのは太陽で、そのとき発した「アー」という音声は「太陽」を意味することになり、さらに他の音との規則的な組み合わせから、さまざまな対象や概念の名前が生まれた」というような、きわめて素朴な言語起源説だったが、想定された原始語彙の形がたまたまトルコ語に似ていたことから、「トルコ語は世界最古の文明語で、トルコ民族が世界中を移住する過程で、多くの言語がトルコ語から語彙を導入した」という仮説に発展した。つまりこの説を認めると、外来語彙も元はトルコ語であることになり、外来語彙を固有語彙で置き換える必要がない、という結論が導かれることになる。言語純化運動に批判的であった保守派は、この説を利用して「固有トルコ語」の廃止をはかった。1938年にアタチュルクが死去すると、純化運動はもはや全国的な運動ではなくなり、賛成する左派と反対の立場をとる右派の間の論争の対象となった。トルコ言語協会は、この後、言語純化運動の拠点として、協会外の反対派と対峙しながら「固有トルコ語」の整備と普及に努めることになる。

#### 4. 1940年代から1980年代にかけて

アタチュルクは、トルコ言語協会の活動がそのときどきの政権や経済状況などの影響を受けないように、その個人資産の一部（銀行株式）の運用益を運営資金とするよう遺言し、これは現在でも変わっていない。運営の経済的基盤を与えられたトルコ言語協会は、アタチュルクの死後少なからぬ抵抗に会いつつも「固有トルコ語」の整備と普及に努めることができた。そして、1940年代には、トルコ言語協会の代表的出版物となる『正書法の手引き』と『トルコ語辞典』が出版された。

『正書法の手引き』は、ラテン文字が採用された1928年に言語委員会によって編纂された『正書法辞典』に代わるものとして、トルコ言語協会により1941年に第1版が出版された（その後現在に至るまで十数版を重ねている）。この時期までにラテンアルファベットがほぼ定着し、正書法規則のより実用的なガイドブックが必要となったことを物語っている。

『正書法の手引き』に遅れること4年、1945年には『トルコ語辞典』の第1版が出版された（最新のものは1998年に刊行された第9版）。「固有トルコ語」の語彙を含む最初の辞書である。新たに定着した固有語彙だけでなく、実際にはまだ使われていない固有語彙までも載せられている一方で、外来語彙には固有語彙が併記され、序文では、外来語彙の代わりに併記された固有語彙をなるべく使うことが奨励されている。

1950年、アタチュルクの作った共和人民党に代わり保守系右派の民主党が政権につくと、トルコ言語協会と保守派の対立は、もはやだれの目にも明らかなものとなった。それまでは名目的であるにしろ教育大臣がトルコ言語協会の会長を務めたが、トルコ言語協会は1951年に臨時言語会議を召集し、独自に会長を選ぶことができるように協会の規約を改訂した。こうしてトルコ言語協会は、左派としての政治的姿勢を明確にしていく。メンバーもほとんどが左派の文化人や研究者となった。その結果、右派の人々はアラビア語・ペルシア語系外来語を多く使い、左派の人々は「固有トルコ語」を使うという状況が生まれた。個人にしろメディアにしろ、用いる語彙からその政治的立場がわかるという事態になったのである。

「固有トルコ語」の選定方法にも変化が現れた。それまでは、地域方言や過去の文献から「固有トルコ語」の候補を探したり、かつて生産的だった派生接尾辞を用いて新造語を作り出す方法が取られたが、50年代になると、そのような回りくどい方法よりも、語感に頼って安易に新造語を作り出すことが多くなった。この時期のトルコ言語協会でも重要な役割を果たしたのが、文芸批評家のヌールッラー・アタチである。1951年にトルコ言語協会の理事に選出されたアタチは、その辛辣な批評スタイルを武器に若い作家たちに対し大きな影響力を持ち、この影響力を利用して「固有トルコ語」を文化人に普及させていった。さまざまな分野の術語・用語辞典も出版された。その結果、膨大な数の「固有トルコ語」語彙が提案されたのである。

この時期以降、トルコ言語協会は、政治的立場を先鋭化させ、特に左派的な文化人に影響力を及ぼした。しかし、民衆からは次第に乖離することとなり、新たに提案される「固有トルコ語」語彙の普及率は、言語純化運動初期に比べ大幅に低下した。70年代に入ると、大学や職場で左派と右派の対立が激化し、政府要人や文化人を狙ったテロが相次いだ。筆者は、ちょうどこの頃ト

ルコ語を学び始めたのだが、留学から帰国した知人から聞いた、「左派の活動家に呼び止められたら「固有トルコ語」を、右派の活動家だったらアラビア系・ペルシア系の外来語を使わないと大変なことになる」というような、本気とも冗談ともつかない話を今でも記憶している。

## 5. 1980年代以降

1980年9月、暴動とテロに終止符を打つために介入した軍は、国民の圧倒的支持を得、治安確保を目指した政策を実施した。現在では当時の非民主的な手法が批判されることもあるが、社会的安定が急速に回復されたことは事実である。そして1982年には憲法が改定され、トルコ言語協会の立場にも大きな変化が生じた。憲法により「アタチュルク文化言語歴史高等協会」が設立され、トルコ言語協会は、トルコ歴史協会とともにその傘下に置かれることが決められたのである。長年にわたり保持してきた特別な法人格は失われ、政府の監督下に置かれることになった。例えば、トルコ言語協会のメンバーは、「アタチュルク文化言語歴史高等協会」により指名された20名と、「高等教育委員会」（同じく1982年の憲法により設立された大学を管轄する機関）により指名を受けた20名から構成されることになった。その結果、左派のメンバーは一掃され、代わって保守派の研究者がトルコ言語協会の運営に当たることになった。協会から閉め出されたかつてのメンバーは「言語協会」を結成し、独自に正書法の手引きなどを出版しているが、あまり影響力を持つに至っていない。

## 6. 現在のトルコ言語協会

現在トルコ言語協会は、アフメト・ビジャン・エルジラスン氏を会長として文献学の研究者を中心とした学術委員会により運営されている。委員は40名で、ほとんどが大学との併任である。委員はまた、辞典編纂研究、文法研究、言語学研究、用語研究、方言研究、文献研究の6部門のいずれかに属し、研究に従事している。他に11名の専門職員と79名の一般職員が、学術委員の活動を支援するために働いている。

メンバーが交代したことにより、アラビア・ペルシア語系外来語を「固有トルコ語」で置き換える試みは、もはや行われていない。ただし、「固有トルコ語」のなかで定着したものは、敢えて外来語に戻さず、認める方針であることが、80年代以降に出版された『トルコ語辞典』などから窺える。また、固有トルコ語化がまったく放棄されたわけではなく、近年の英語などからの外来語の急増に対し、それらに代わる新たな「固有トルコ語」語彙の提案が、月刊誌『トルコ語』などを通じて再び始められているのは興味深い。

トルコ共和国外のチュルク系言語へ関心を向けている点も、新しいトルコ言語協会の特徴であろう。中央アジアやカフカースからの研究者の招聘が盛んに行われている。将来、中央アジアからカフカースにかけて、ロシア語に代えてトルコ語を共通語にしようという目論見があるのかもしれないが、いずれにしろ、どちらかというところを向いていた80年代までのトルコ言語協会と対照的である。

90年代に入り、出版活動も回復しつつある。月刊の『トルコ語』、年2回発行される『トルコ世

界言語文学雑誌』,そして紀要である『トルコ語研究年報』などの定期刊行物とともに,研究モノグラフの出版点数も増えている。もちろん,『正書法の手引き』と『トルコ語辞典』は,依然として協会のもっとも重要な出版物であり,版を重ねている。今後,トルコ言語協会が再びイデオロギーの対立に巻き込まれることなく,トルコ語研究の中心として,また,国語問題の諮問機関として,着実な発展を遂げられるかどうかは,トルコにおける政治的安定がどれだけ続くかにかかっているように思われる。

トルコ言語協会 (Türk Dil Kurumu)

住所: Atatürk Bulvarı 217, Kavaklıdere, Ankara, TÜRKİYE

ホームページ <http://www.tdk.gov.tr/>